

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：32657

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00043

研究課題名(和文)メルロ＝ポンティ芸術論とことばの問題

研究課題名(英文)Merleau-Ponty on Theory of Art and Language

研究代表者

本郷 均 (Hongo, Hitoshi)

東京電機大学・工学部・教授

研究者番号：00229246

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究によって、メルロ＝ポンティの芸術論における「音楽」の位置づけが、積極的な意味を持っていることを明らかに出来た。とりわけ、プルースト『失われた時を求めて』に記されている「小楽節」に関わる記述の中で、音楽のイデア的性格に基づいて、音楽と音楽の演奏者との関係を描いており、その点からメルロ＝ポンティはその記述をそのまま受け取るわけではないが、大きな刺激を受けている。また、音楽が「存在の渦を象る」ことのできる場面は、同時に言葉が言葉として意味を持つことになる場面でもあることを明らかにし、根本的には言葉が意味を持つとはどのようなことかを明らかに出来た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言葉の機能は、一見すると、単なる情報伝達の道具と捉えられがちである。しかし、その点にのみ注目すると、小説や詩、さらに哲学などの、創造的な言語表現がなぜ可能であるのかがわからなくなってしまう。本研究は、言葉が意味を持つようになる場面が、音楽の場面と共通した所にあることを明らかにし、そのことによって、また音楽がどうして何か意味を表現しているように思われる次第も明らかにすることができた。言葉は人を傷つけもし人を慰めたりもし、さらには新しい事柄を考えることも可能にする所以の一端を明らかにすることの意義は大きいと思われる。

研究成果の概要(英文)：Through this study, it became evident that the positioning of "music" in Merleau-Ponty's aesthetics has rather significant implications. Specifically, within the descriptions relating to the "little phrase" in Proust's "A la Recherche du temps perdu", Merleau-Ponty describes the relationship between music and its performers based on the ideal nature of music. While not accepting those descriptions as they are, Merleau-Ponty is greatly stimulated by them.

Furthermore, it was revealed that moments in which music can "figurer le tourbillon d'etre" are also moments in which parole acquire meaning as words. Ultimately, this study was able to shed light on what it fundamentally means for words to have meaning.

研究分野：西洋哲学

キーワード：メルロ＝ポンティ 芸術 音楽 言葉 ミシェル・アンリ 九鬼周造

1. 研究開始当初の背景

本研究は、申請者がこれまで進めてきたメルロ＝ポンティの哲学における存在論と芸術(論)との関係に関する研究によって得られた「芸術の創造性による存在理解の深化」という知見を背景として、メルロ＝ポンティの「考えなかったこと」から彼の哲学が言語として成立する可能性を探る方向へと研究をさらに進めることを目的とする。

これを考察するに当たって、メルロ＝ポンティにおける「存在論」の構想において「芸術」が果たす役割がいかなるものか、これについて考察することを主眼とする。その際、特に、申請者がこれまで「絵画」に関して考察を進めてきたその成果を踏まえ、メルロ＝ポンティが直接にはほとんど語っていない「音楽」についての考察を進める。これに際して、a)音楽を「最も純粋な言語」(マラルメ)として捉える視点、一方で、b)メルロ＝ポンティにとって言語の問題は存在論としての哲学の存立可能性に関わっているという視点、この二つの視点から、メルロ＝ポンティが明示的には語っていない音楽への問いは、メルロ＝ポンティが中期以降重視した言語の問題により近いところから光を当て、メルロ＝ポンティの思考の淵源を解明することが期待できる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、核心となる問い「メルロ＝ポンティの存在論において、芸術、特に音楽は、いかにして哲学の言語のありかたを示しうるか」を、さらに次のように具体化することで明確に示すことができる。すなわち、メルロ＝ポンティのいわゆる「肉 chair」と呼ばれる存在概念が、具体的な芸術(作品)という感性的な仕方で現れる場面においてどのように捉えられ、かつそれがどのように哲学の言語にもたらされうるか、これを探究することである。

3. 研究の方法

本研究の方法は、(1)メルロ＝ポンティがテキストにおいて「音楽」に与えている位置づけの検討を行うこと、(2)フランス国立図書館に収蔵されている遺稿データから、公刊された文書には明らかにされていない読書ノートなどを通じて、メルロ＝ポンティの芸術(論)に関する情報源を精査すること、(3)他の哲学者たち(アンリ、ハイデガー、ジャンケレヴィッチなど)の芸術論との比較研究を行うこと、この3つの方法によって進められる。ただし、この内の(2)については、初年度以外、COVID-19の影響により渡仏できなかつたため、さまざまな確認をすることができず、中断したままに終わっている。

4. 研究成果

(1)メルロ＝ポンティによる音楽への論及は、絵画への論及に較べると多いとは言えない。しかし、細かく検討してみると、比較的重要な箇所、音楽を比喻として用いたり例として引いたりする場面がある。

まず、『知覚の現象学』など、前期のメルロ＝ポンティは、特にブルースト『失われた時を求めて』に現れる音楽についてのさまざまな叙述を援用しながら、次のような考え方を示す。すなわち、普通の考え方からすれば、音楽という対象が、作曲家や演奏家などの主体によって存在することになる。しかし、実際の音楽家たちにとって、このような主客関係は反転され、自体的に存在する音楽以外のものはすべて、この音楽によってその存在意味が与えられているようになる、というのである。ここで示されている主客関係の反転という事態は、後年の『見えるものと見えないもの』を中心とする存在論的な観点において「反転可能性(可逆性)」として取り出されてくる事態に通ずるものである。

では、何が現れるのか。たとえば、バッハやドビュッシーのような作曲家の音楽を聞く際、そこにバッハやドビュッシーによる「可能的音楽」の領域の中で、ある一つの世界が現れる、と言う。すなわち、音楽を聴取する経験は、一つの世界の現れの経験であり、根本的なところでは、バッハやドビュッシーのような作曲者その人すらいわば媒体としての存在意味になる。むしろ、バッハの構築した世界がバッハであることになるのである。そして、この観点は、この時期には、ただちにマラルメに代表されるような詩の言語の捉え方につながることになり、まだ、なぜ音楽の世界のあらわれと詩的な言語が通底するのかに関してまでは考察が進んでいない状態であった。

このような事態がなぜ成立可能なのか、この問いに関しては、後期の存在論的な視点を導入することによって、初めて考察が可能になる。

この立場が現れるのは、晩年になってから、『見えるものと見えないもの』の「絡み合い - キアスム」の章末尾においてであると見ることができ、これはとりわけ、「肉と理念(イデー)」の関係を考察する箇所である。理念の問題を考察するにあたっては、言語の問題との関係が問われるべき所であるが、その問題は「ロゴス」に関わる問題として捉え直され、特に、フッサールのいう「感性的世界のロゴス」が念頭に置かれている。このロゴスの働きが二重の役割を持つものとして捉えられていることが重要である。すなわち、一方では、無言の流れを監視するものとしてのロゴスがある。こちらは、ロゴスの持つ「秩序」という意味と関連付けられていると

言えるだろう。すなわち、言語化される以前の「無言の流れ」であっても、それはカオスではなく、すでに秩序づけられてはいる、とする。この点を踏まえて、他方でこのロゴスは、意味作用 (signification) の現れであり、秩序づけられた無言の流れが表現にもたらされる契機ともなる。こちらでは、ロゴスの持つ「言葉」という意味、さらには「理性」という意味にまで繋がるものが見てとられている。

ところで、この言葉は世界を捉えるものとしては、「象るもの(figuratif)」であり、世界を分節化して意味を与えていく作用を持つ。この点で、この作用と絵画の線や形とは通底していることになる。このあり方を可能にしているものとして、メルロ＝ポンティは「等価システム」を考える。この概念は必ずしも一義的に使用されているわけではないが、ここでは、たとえばマラルメに詩を「ことばの音楽」と呼ぶことを可能にしていたり、ヘミングウェイがセザンヌの絵画から文章の奥行きについて学んだりすることを可能にするシステムとして作動している。

では、音楽はどのように関係しているのだろうか。メルロ＝ポンティが音楽について述べた文言の中で、もっともよく知られているのは、『眼と精神』に書かれた次の一文であろう。「音楽は、[...]、存在の下図、その潮の満ち引き、その増大、その破裂、その渦(tourbillon)以外のものを象るには、世界と示しうるもののあまりに手前にある。ここで音楽は「渦」などを「象る」ものであることが示されているのだが、別の箇所「渦」は、等価システムを言い換える一つの語として現れている。よって、音楽も、先のロゴスとやはり等価システムを通して象るものとして関わっていると考えることができる。音楽は、ブルーストのいう「ことばにならないことば」であり、しかしロゴスの働きとしては「象る」ものとして、一つの世界のあらわれの予示であり、あるいはその下図を描くものとなる。このように考えると、メルロ＝ポンティの音楽の位置づけは、従来考えられていたような消極的なものではなく、むしろ積極的な意味合いを帯びていることが明らかになる。

(2) フランス国立図書館に収蔵されている遺稿データは、従来、マイクロフィルムとなっていたものが2019年10月に電子化された。ただし、いまだ著作権が切れていないため、フランス国立図書館内のコンピュータからのみアクセスすることが可能である。そのため、2020年には、ひとまず従来のマイクロフィルムの状態であった時のデータとの異同の確認を行い、おそらくはフィルムの状態による理由で電子化されていない一本を除いて、以前の物と同一の状態で電子化されていること(ピンボケも含めて)が確認できた。その後、covid-19の影響で渡航することができなくなったため、今回の補助金では、この確認のみで終えざるをえなかった。

(3) 今回、もっぱら比較のために参照した哲学者は、ミシェル・アンリと九鬼周造である。

アンリは、メルロ＝ポンティと同様に、音楽を主題化してはならず、絵画、特にカンディンスキーにほぼ集中することで、「生の哲学」からする芸術論を構築している。アンリ哲学の根底にある生と感性の探究は、メルロ＝ポンティには明示的には見られないものであるが、両者に共通する要素として、光と闇とに関する議論が見られる。メルロ＝ポンティは、ヘルメス・トリスメギストスの「光の声とも思われた言葉なき叫び」を芸術の根本的な意味として捉えている。これに対してアンリについては、エックハルトの「真の光は、ひとがそれに気付かなくても、闇の中で輝いている」という一句を対置することができる。アンリは、光と闇との対比を強く意識して明示しているが、メルロ＝ポンティは、闇についてはさほど主題化していないという点が特徴的だと言える。

九鬼周造に関しては、まだ緒に着いたばかりであるが、九鬼の『偶然論』に先立ちフランスのポンティニーで行った講演で示された時間論を検討した。そして、「文学を言語によって表現されたもの全体」だとする彼の立場からして言語論でもある『文藝論』の議論、特に詩における押韻の問題において深く関係している、との見通しを得た。

この論点は、メルロ＝ポンティにおいては、マラルメとヴァレリーの詩論における「ことばの音楽」を承けた言語についての捉え方との交錯を考えることができる。とりわけ、「肉と理念(イデー)の関係」というメルロ＝ポンティが最後に残した問題、特に『見えるものと見えないもの』においてほの見えているに留まる時間論を考えるヒントを得ることが出来たところで、本補助金の期間を終了することになった。

(4) その他

この間、本補助金により得られた成果の一部を反映させたものとして、『新しく学ぶ西洋哲学史』(荻野弘之、山本芳久、大橋陽一郎、本郷均、乗立雄輝共著、ミネルヴァ書房) および『現代に生きる現象学』(榎原哲也、西村ユミ、本郷均共著、放送大学教育振興会)を刊行している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 本郷均 | 4. 巻 26 |
| 2. 論文標題 「酒井麻依子著『現れる他者 消える他者』」 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 フランス哲学・思想研究 | 6. 最初と最後の頁 318-321 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 本郷均 | 4. 巻 10 |
| 2. 論文標題 「プロト現象学」と「生の現象学」のはざまにて | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 ミシェル・アンリ研究 | 6. 最初と最後の頁 7-14 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20678/henrykenkyu.10.0_7 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 本郷均 | 4. 巻 108 |
| 2. 論文標題 メルロ＝ポンティの存在論における音楽の位置 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 フィロソフィア | 6. 最初と最後の頁 117-137 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 4件/うち国際学会 1件）

| |
|---------------------------|
| 1. 発表者名 本郷均 |
| 2. 発表標題 音楽と感性 |
| 3. 学会等名 早稲田大学哲学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名 本郷均 |
| 2. 発表標題 川瀬雅也『生の現象学とは何か』合評会コメンテーター |
| 3. 学会等名 日本ミシェル・アンリ哲学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 本郷均 |
| 2. 発表標題 九鬼周造における日本詩とフランス詩の比較 押韻の視点から |
| 3. 学会等名 ドイツ研究振興協会(DFG)（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--------------------------------|
| 1. 発表者名 本郷均 |
| 2. 発表標題 芸術をめぐる |
| 3. 学会等名 メルロ＝ポンティ・サークル（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

〔図書〕 計3件

| | |
|------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 川瀬 雅也、米虫 正巳、村松 正隆、伊原木 大祐 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 法政大学出版局 | 5. 総ページ数 350 |
| 3. 書名 ミシェル・アンリ読本 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 荻野 弘之、山本 芳久、大橋 容一郎、本郷 均、乗立 雄輝 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 ミネルヴァ書房 | 5. 総ページ数 400 |
| 3. 書名 新しく学ぶ西洋哲学史 | |

| | |
|----------------------|-----------------|
| 1. 著者名 榊原 哲也、本郷 均 | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 放送大学教育振興会 | 5. 総ページ数 260 |
| 3. 書名 現代に生きる現象学 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|